「狂心渠」の経路と高市大寺の位置 ―相原嘉之説批判―

小澤　毅

1　はじめに

古代の飛鳥とその周辺の地域をめぐっては、近年、相原嘉之があいついで意欲的な論文を発表している。一連の精力的な執筆活動は賞賛に値し、筆者もさまざまな局面で学恩に浴してきた。ただ、それらの論考は、内容的にも傾聴すべき点が多いが、一方で疑問とせざるをえない部分も散見する。本稿では、そのうち、「狂心渠（たぶれごころのみぞ）」の経路[1]と高市大寺（たけちのおおでら）の位置[2]を取り上げ、相原説の問題点を指摘するとともに、若干の私見を述べることにしたい。

「狂心渠」　「狂心渠」は、斉明２年（656）に斉明天皇が命じて掘削させた資材運搬用の水路である。彼女は「事を興すことを好みたま」うと評されたが、この水路開削も、人々に「狂心渠」と誹謗されるほどの大土木工事であったと伝わる（『日本書紀』斉明２年是歳条、【史料１】）。

【史料１】　『日本書紀』巻 26　斉明２年是歳条

是歳、於二飛鳥岡本一、更定二宮地一。時高麗・百済・新羅並遣レ使進調。為張二紺幕於此宮地一、而饗焉。

遂起二宮室一。天皇乃遷、号曰二後飛鳥岡本宮一。於二田身嶺一冠以二周垣一。《田身山名。此云二大務一。》復於二嶺上両槻樹辺一起レ観、号為二両槻宮一、亦曰二天宮一。

時好レ興レ事、廼使二水工穿レ渠、自二香山西一、至二石上山一。以二舟二百隻一載二石上山石一、順レ流控二引於宮東山一、累レ石為レ垣。時人謗曰、狂心渠。損費、功夫三万餘矣。費損、造垣功夫七万餘矣。宮材爛矣。山椒埋矣。又謗曰、作二石山丘一、随レ作自破。《若拠二未レ成之時一、作二此謗一乎。》（後略）　　（《　》は割註）

高市大寺　高市大寺は、舒明 11 年（639）に最初の勅願寺として創建された百済大寺（くだらのおおでら）（吉備池廃寺[3]、桜井市吉備）を、天武２年（673）に高市の地に移建したものである（『大安寺伽藍縁起幷流記資財帳（だいあんじがらんえんぎならびにるきしざいちょう）』〔【史料２】〕、また、『日本書紀』天武２年 12 月戊戌〔17 日〕条にも造高市大寺司の任命記事が見える〔【史料３】〕）。

以後、大官大寺（だいかんだいじ）、さらに大安寺と寺号を変えて法燈を今に伝え、東大寺が創建されるまでは名実ともに国家筆頭の官寺としての地位にあった。しかし、寺地の移転をともなう複雑な沿革をたどったため、未解決の課題も少なくない。とくに、完成間近で焼失し

た文武朝大官大寺（『扶桑略記』によれば和銅4年〔711〕焼亡、【史料4】）とは別地に存在したはずの高市大寺（天武朝大官大寺）の所在地は、複数の候補が挙げられているものの、今なお確定にいたっていない。

【史料2】　『大安寺伽藍縁起幷流記資財帳』

初、飛鳥岡基宮御宇天皇之未二登極位一号曰二田村皇子一。（中略）仍、即二天皇位一十一年歳次己亥春二月、於二百済川側一、子部社乎切排而、院寺家建二九重塔一、入二賜三百戸封一、号曰二百済大寺一。此時、社神怨而失レ火、焼二破九重塔並金堂石鴟尾一。（中略）以後、飛鳥浄御原宮御宇天皇、二年歳次癸酉十二月壬午朔戊戌、造寺司小紫冠御野王・小錦下紀臣訶多麻呂二人任賜、自二百済地一移二高市地一、始二院寺家一、入二賜七百戸封・九百三十二町墾田地・卅万束論定出挙稲一。六年歳次丁丑九月康（庚）申朔丙寅、改二高市大寺一号二大官大寺一。（後略）

【史料3】　『日本書紀』巻29　天武2年12月戊戌条

戊戌、以二小紫美濃王・小錦下紀臣訶多麻呂一、拝二造高市大寺司一。《今大官大寺、是。》（後略）　　（《　》は割註）

【史料4】　『扶桑略記』第6　元明天皇和銅4年辛亥条

和銅四年辛亥、大官等寺幷藤原宮焼亡。

2　「狂心渠」の経路

「狂心渠」の掘削　　まず、「狂心渠」について取り上げよう。斉明2年（656）、前年冬に罹災した飛鳥板蓋宮（あすかのいたぶきのみや）に代わる正宮として、斉明天皇は後飛鳥岡本宮（のちのあすかのおかもとのみや）を造営し、そこへ移った。「飛鳥の岡本に更に宮地を定む」とあることから、舒明天皇の飛鳥岡本宮（あすかのおかもとのみや）（630～636年）と同地に存在したことがうかがえるが、それは同時に、飛鳥板蓋宮（643～655年）の故地でもあったと考えられる[4)]。

そして、同条には、田身嶺（たむのみね）（多武峰）の頂上に垣をめぐらせ、嶺の上に両槻宮（ふたつきのみや）を営んだという記事につづけて、香山（かぐやま）の西より石上山（いそのかみのやま）にいたる渠（みぞ）を掘らせたこと、二百隻の舟に石上山の石を積み、宮の東の山に運んで、石を重ねた垣をつくったこと、時の人が謗って「狂心渠」と呼んだことが記される（【史料1】）。

「狂心渠」関係の遺構　　上記の記事については、信憑性を疑う説もあったが、1992年に、後飛鳥岡本宮（飛鳥宮跡Ⅲ-A期）の東の丘陵で、壁面に砂岩切石を積み重ねた大規模な版築土塁の存在が確認された（酒船石遺跡）。それらの砂岩切石は、天理市の石上（いそのかみ）・豊田周辺で切り出されたことが判明しており、『日本書紀』の記載を裏づけている[5)]。

さらに、その丘陵の西側から飛鳥寺の寺域東側にかけて、自然の谷川を人工的に改修

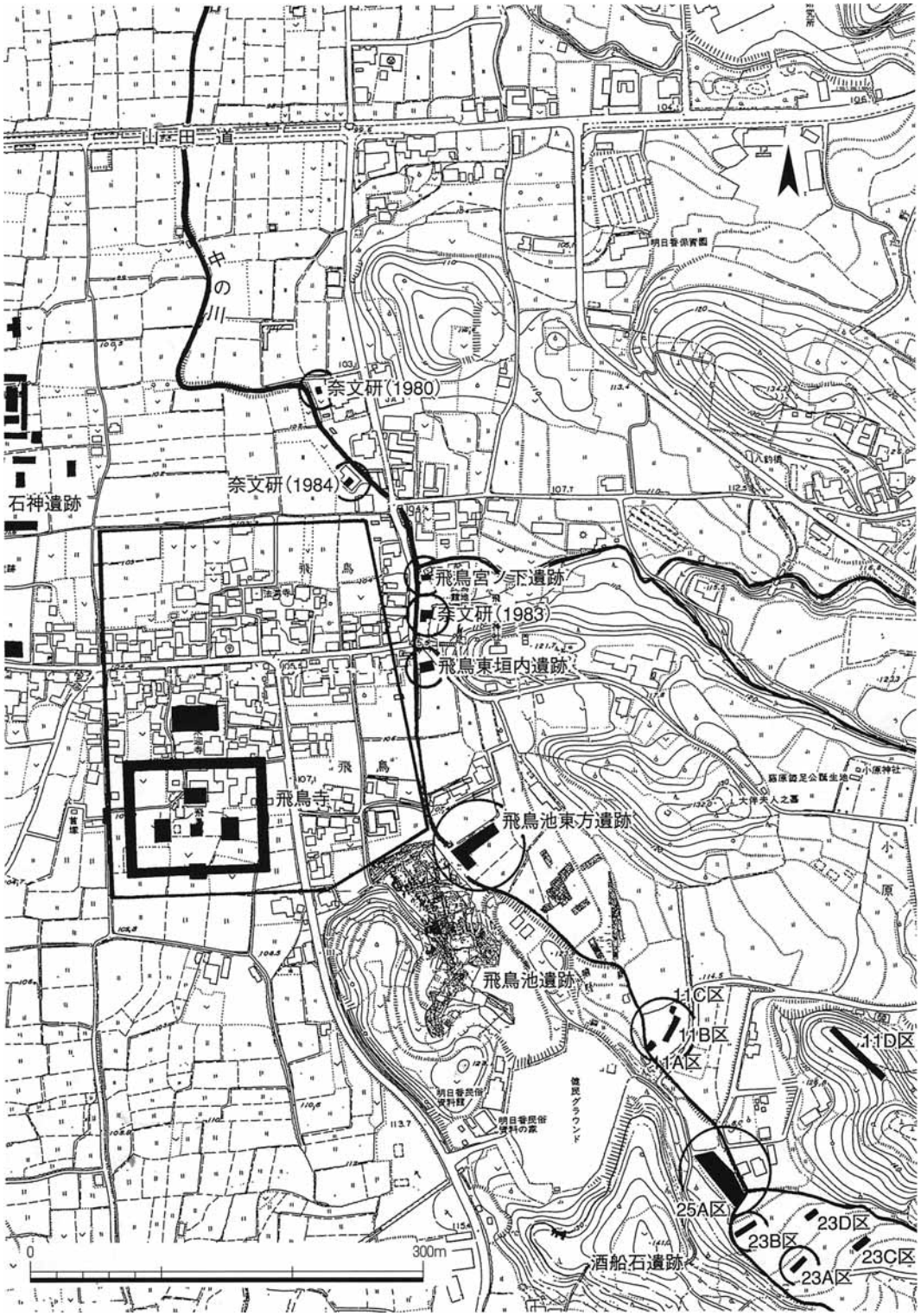

図１ 「狂心渠」の検出地点（阿倍山田道以南）

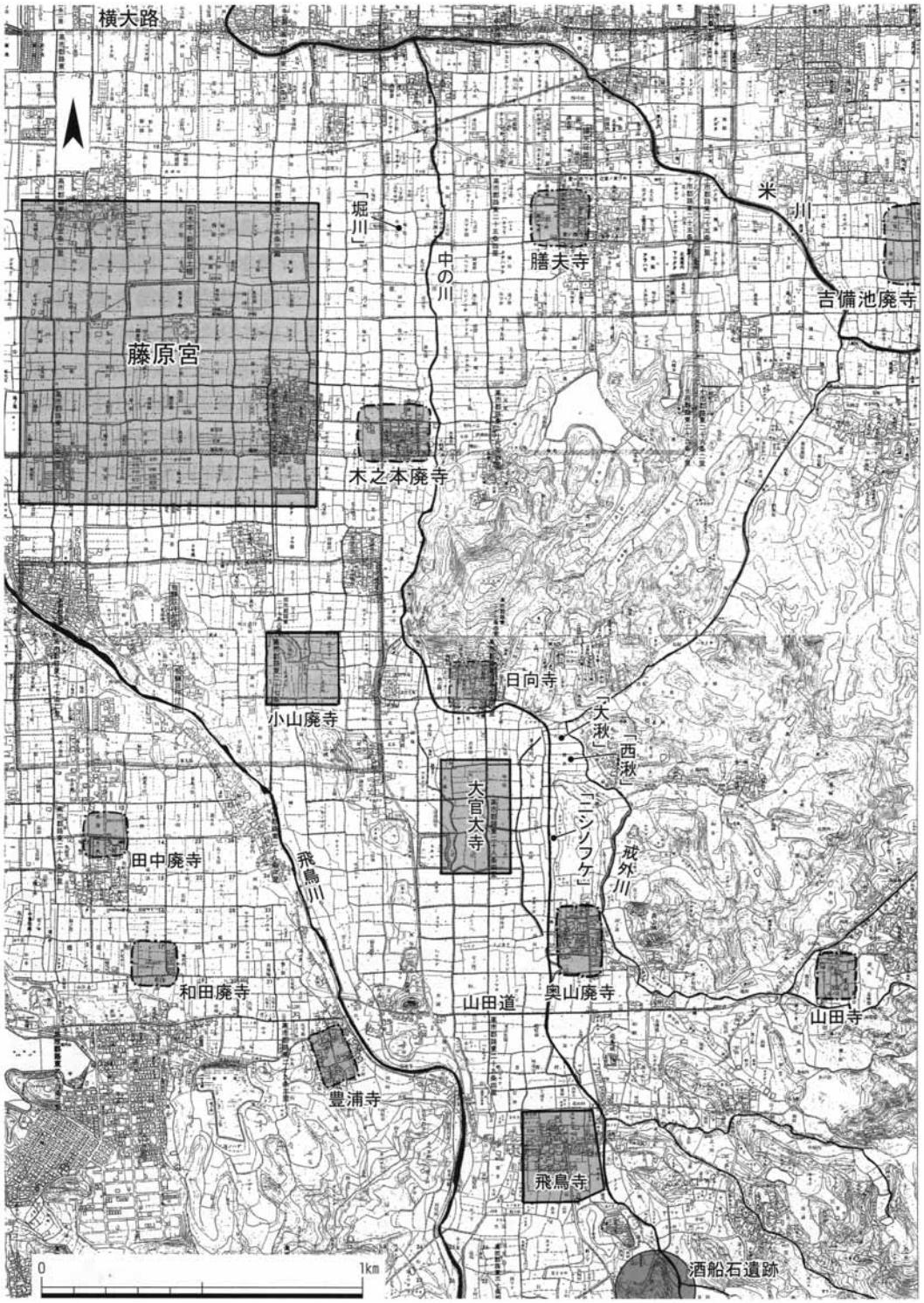

図２　相原による「狂心渠」南半部の経路

した大規模な流路が存在することも明らかとなった[6]（図1）。この流路は、奥山廃寺〔大后寺[7]〕の西で検出された幅20m以上の大溝[8]をへて、香具山の西裾を流れる現在の「中の川」につながると判断してよく、「狂心渠」にあたることは疑いない[9]。中の川は、現状では小川にすぎないが、香具山西麓の発掘調査では、幅25mほどの大規模な流路であったことがわかっている[10]。

相原による「狂心渠」の経路　ところが、相原嘉之は、香具山以南の「狂心渠」南半部の経路について、中の川の現流路にほぼ踏襲されているとの見方を否定し、大官大寺の東、奥山廃寺北方の字「ニシノフケ」（以下、字名は『大和国条里復原図』[11]による）に残る南北方向の窪地をへて、香具山南麓を西へ流れたとする。

最初にこの窪地を「狂心渠」に比定したのは田村吉永であるが[12]、相原はそれを支持したうえで、「狂心渠」は、「ニシノフケ」に北接する「西湫」「大湫」[13]から西へ折れ、香具山南麓に想定される日向寺の寺域を南に迂回したのち、中の川の現流路に合したと推定している（図2・3）。

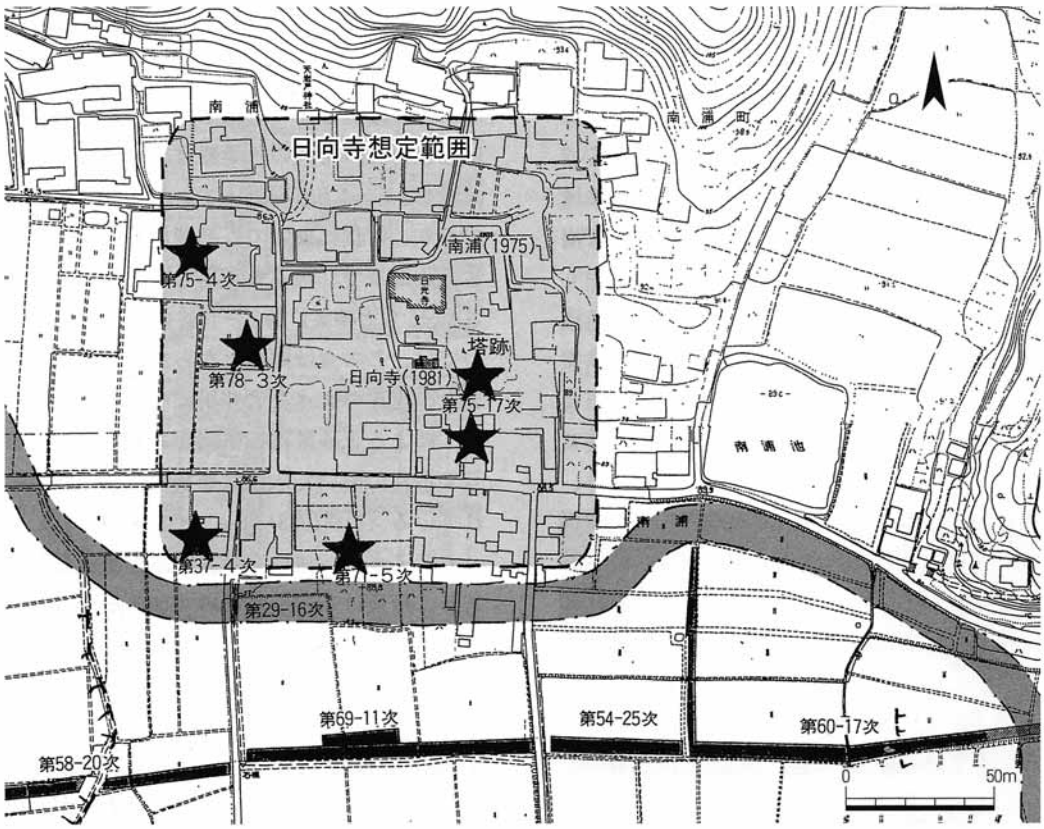

図3　相原による香具山南麓の「狂心渠」の経路（★は遺構及び地山の確認地点）

３　「狂心渠」南半部の経路の再検討

大官大寺周辺の推定経路　以下、香具山以南の「狂心渠」南半部の経路について再検討しよう。相原は、（文武朝）大官大寺周辺の経路として、次の３つのルートを候補に挙げる（図 4）。

① 現在の中の川に沿う流路

② 大官大寺の寺域東辺の（岸俊男説）東四坊大路[14] 上を流れる南北大溝

③ 大官大寺の寺域東方、「ニシノフケ」「西湫」「大湫」とつづく南北の流路痕跡

そして、③を「狂心渠」の本来のルートとし、「大湫」から西へ折れて、香具山南麓を西流したとする。一方、②は、大官大寺の造営資材を運搬するために掘削したバイパスルートとみる。

現地の地形と水系　しかしながら、この想定には大きな問題があるといわざるをえない。地形や水系に対する誤解ないし認識の欠如が認められるからである。

実際、現地の微地形や水路の流下方向を閲すると、②および③の地域は、香具山の西を流れる中の川の水系ではなく、香具山の東を流れる戒外川（かいげがわ）の水系に属することが明らかである。したがって、そこに降り注いだ雨や流れてきた水は、「大湫」から北東へと流れ、戒外川に注ぐことになる。

それにもかかわらず、相原が③から西に折れて香具山南麓を西流するルートを想定し

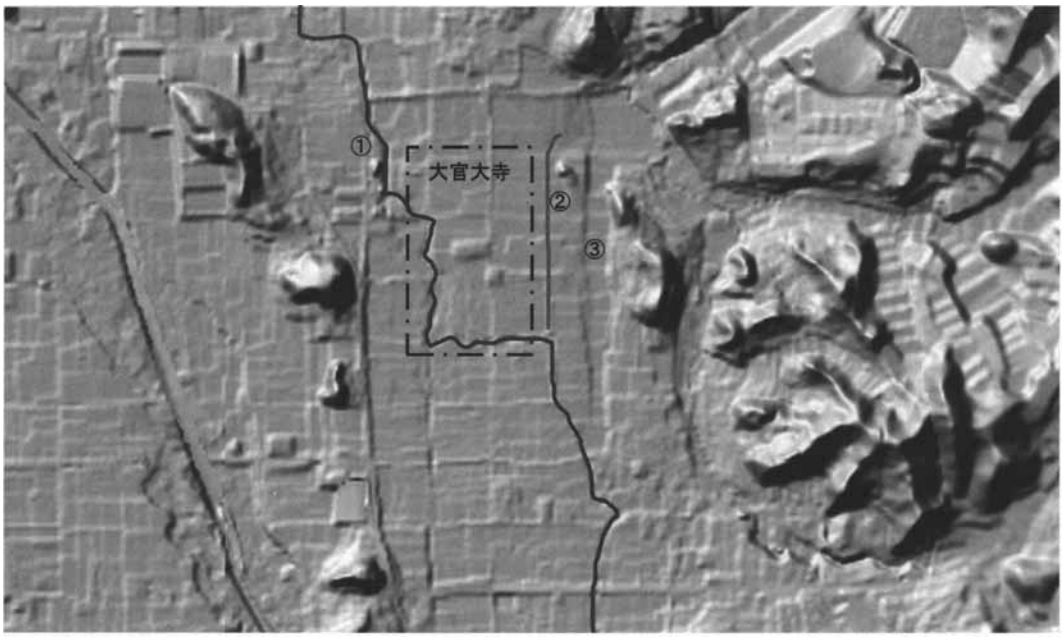

図４　相原による大官大寺周辺の「狂心渠」の候補経路

たのは、香具山の北東で戒外川を堰き止めた溜池[15]が6世紀後半には存在し[16]、「舟運に向いていない」[17]からにほかならないだろう。けれども、だからといって、③の流路が、水系を異にする香具山西南麓の中の川につながっていたとするのは、あまりにも恣意的な解釈ではないか。事実を枉げて（あるいは無視して）史料の記述に合わせようとするのは問題である。

また、箭口（やぐち）氏の氏寺（箭〔矢〕（や）口寺（ぐちでら））とみられる現在の日向寺[18]は、7世紀前半の創建と推定されるが、相原も述べるとおり、香具山南麓の微高地上に位置し、この微高地は南方の文武朝大官大寺へとつづいている。奈良文化財研究所の1/1,000地形図の等高線からも明らかなように、微高地の東西は両側とも低くなっており（図5）、水が低きに流れるかぎり、「大湫」から西へ微高地を横断する流路は存在しえない[19]。さらに、相原が想定したような流路が掘削されたのであれば、何らかの痕跡をとどめていそうなものだが、そうした痕跡もまったく認められない。日向寺の南を西流する「狂心渠」の経路の推定は、地形や水系を無視した空論と断じてよかろう。

中の川に沿う「狂心渠」　そもそも、香具山以北の中の川の流路は「狂心渠」をほぼ踏襲していることが確実であり、かつ阿倍山田道以南についても同様に考えられる以上、その中間部分にあたる文武朝大官大寺周辺のみ、あえてそれを大きくはずれた経路を想定する理由は見出しがたい。ところが、相原は、現在の中の川が文武朝大官大寺の伽藍（南門および西面回廊）と重なり、造営前の旧流路も伽藍地内では確認されていないことを理由に、中の川に沿う①の経路を否定した。

たしかに、相原が記すごとく、伽藍地の東南部と西南部で、中の川は、条里の坪界に沿うかたちでほぼ直角に方向を転じており、藤原京廃絶後に施工された条里地割に合わせた措置と解される。しかし、相原も認めるように、それはあくまでも廃都や伽藍焼亡の後のことであって、文武朝大官大寺の造営にかかわるものではない。

藤原京期における伽藍地は、当然のことながら、「狂心渠」を避けて設定されたはずであり、その流路が伽藍地の外周を区画する掘立柱塀の外側に位置したことは、おそらく間違いないだろう。よって、この部分の「狂心渠」の流路は、現在の中の川よりやや南と西にずれ、発掘調査がほとんど及んでいない文武朝大官大寺の伽藍地の南方および西方（ギヲ山との間）に求められる。そして、その北は、西山丘陵の東側の、1/1,000地形図の等高線が示す南北方向の窪地を通り、現在の法然寺（ほうねんじ）付近で、中の川の現流路に合していたと考えられる（図5）。

「ニシノフケ」ほかの旧流路　では、③の「ニシノフケ」「西湫」「大湫」とつづく南北方向の流路痕跡の性格についてはどう判断すべきか。

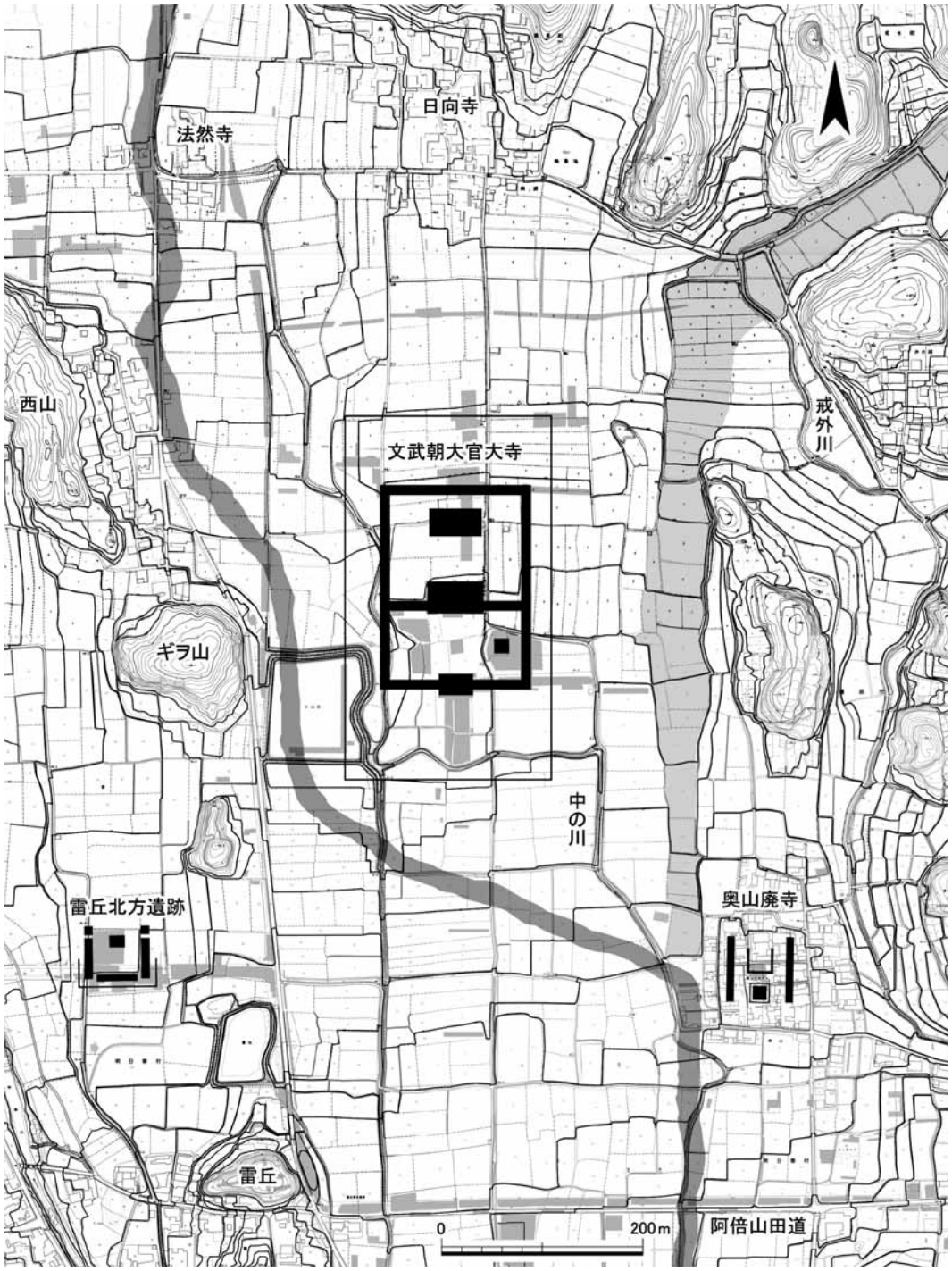

図５　大官大寺周辺の地形と「狂心渠」推定経路

（濃い網目が推定経路、薄い網目は旧河道および既発掘区、等高線は 1m間隔）

現状では水流は認められないものの、相原が指摘したように、形状からみて、これが流路痕跡（旧河道）であることは疑いない。また、その南端が、奥山廃寺の西で中の川の現流路とほぼ接続する点から、中の川の旧流路であったことは確実といえる（戒外川は、奥山廃寺が載る微高地をはさんだ東側を流れるため、その旧流路ではありえない）。中の川は、香具山の西を北流する現在の流路となる以前は、上記の旧河道を経由して、香具山の東を流れる戒外川に合流していたと推定される。

こうした河川の流路変更は、もちろん自然の営力によることもあったが、人為的な改変も少なくなかったことは、あまたの事例が示すとおりである。くわえて、斉明朝の「狂心渠」が、「香山の西」を経由する、現在の中の川に近い流路で設定されている以上、その最有力候補となるのは「狂心渠」の開削だろう。中の川の流路変更は、斉明２年（656）の時点で人工的になされた蓋然性が高いとみるべきである。

この場合、流路の変更が舟運と密接にかかわっていたことは想像にかたくない。すなわち、戒外川下流の溜池を避けて、香具山の西麓を北流する経路へと変更することが、天理方面からの舟の溯航を可能とし、同時に、香具山以北のほかの河川とを結ぶ舟運のうえでも有効であったと考えられる。

「水工（みずたくみ）をして渠（みぞ）を穿（ほ）らしめ、香山（かぐやま）の西より石上山（いそのかみやま）に至る」という斉明紀の記事は、その工事が「狂心渠」と人々に謗られたほど大規模なものだったことを伝えており、文字どおり、香具山の西を経由させる中の川の付け替えも含まれていたと推定したい。

４　高市大寺の位置

次に、高市大寺の位置について取り上げる。冒頭で触れたように、その所在はいまだ確定せず、複数の候補が挙げられているが、相原は「木之本（きのもと）廃寺」（橿原市木之本町周辺）説[20]に立つ。

高市大寺の位置を示す史料　高市大寺の所在にかかわる史料は複数存在しており、まず重視すべきは、『日本三代実録』元慶４年（880）10月20日条（【史料5】）である。そこには、大安寺の申請を認めて返入された旧寺地として、「高市郡夜部村田十町七段二百五十歩」が記され、大安寺三綱牒の「高市大官寺」の寺地に相当する。「高市大官寺」は、高市大寺と大官大寺を兼ねた呼称とみられ[21]、当然、それは天武６年（677）の後者への改称をふまえたものと推定される（相原は、「高市大寺改め（天武朝）大官大寺」を表現した名称とする）。

そして、『日本後紀』大同元年（806）４月庚子条の「於保美野邇。多太仁武賀倍流。野倍能佐賀。（大宮に直（ただ）に向かへる野倍（やべ）〔山辺〕の坂）」[22]（【史料6】）が、藤原宮の南正面に

位置する日高山（ひだかやま）丘陵を下る坂と解されることから、高市大寺は日高山丘陵とともに夜部村に含まれ、文武朝大官大寺と近接した位置関係にあったと考えられる[23]。

【史料 5】　『日本三代実録』巻 38　元慶 4 年 10 月 20 日庚子条

廿日庚子。勅。大和国十市郡百済川辺田一町七段百六十歩、高市郡夜部村田十町七段二百五十歩、返㆓入大安寺㆒。先㆑是彼寺三綱申牒偁。昔日、聖徳太子創㆓建平群郡熊凝道場㆒。飛鳥岡本天皇遷㆓建十市郡百済川辺㆒、施㆓入封三百戸㆒、号曰㆓百済大寺㆒。子部大神在㆓寺近側㆒、含怨屢焼㆓堂塔㆒。天武天皇遷㆓立高市郡夜部村㆒、号曰㆓高市大官寺㆒、施㆓入封七百戸㆒。和銅元年遷㆓都平城㆒、聖武天皇降㆑詔、預㆓律師道慈㆒、令㆑遷㆓造平城㆒、号㆓大安寺㆒。今検㆓両処旧地㆒、水湿之地、収為㆓公田㆒、高燥之処、百姓居住。請。依㆑実返入、為㆓寺家田㆒。従㆑之。

【史料 6】　『日本後紀』巻 13　大同元年 4 月庚子条

（前略）初有㆓童謡㆒曰。於保美野邇。多太仁武賀倍流。野倍能佐賀。伊太久那布美蘇。都知仁波阿利登毛。有識者以為。天皇登祚之徴也。（後略）

ちなみに、上記の想定に対しては、風間亜紀子による反論がある[24]。風間は、「高市大官寺」を高市大寺と大官大寺を兼ねた呼称とみる考えを否定し、「高市の地にあった大官大寺」と解する。そして、大安寺が返還を要求したのは、すでに保持していた「高市郡古寺所」（【史料 7】）以外の、百済大寺と高市大寺＝（天武朝）大官大寺の旧地であって、「藤原京大安寺」（文武朝大官大寺）の旧地は含まれないとした。

【史料 7】　『大安寺伽藍縁起幷流記資財帳』（抜粋）

合処処庄拾陸処　庄庄倉合廿六口　屋卌四口

大倭国五処

一在十市郡千代郷　一在高市郡古寺所　一在山辺郡波多蘇麻

一在式下郡村屋　一在添上郡瓦屋所

しかしながら、「高市大官寺」を「高市の地にあった大官大寺」とする解釈は成立しがたい。【史料 5】は、「天武天皇遷㆓立高市郡夜部村㆒、号曰㆓高市大官寺㆒」と高市郡夜部村に所在したことを直前に明記しており、あらためて所在地を冠する必要はないからである。さらに、「号曰㆓高市大官寺㆒」は、前段の「号曰㆓百済大寺㆒」と完全に対をなす。「百済大寺」が寺名であることは動かないので、「高市大官寺」も同様に寺名とみるほかはなく、「号曰」という表現もそれを裏づける。

また、「高市郡古寺所」の庄は、大安寺がかつて藤原京内に保有した寺地をすべて継承していたわけではない。実際、【史料 1】は、藤原京域に含まれたことが確実な高市大寺

の旧地の返還も要求しているのであるから、旧京で保持した寺地のかなりの部分が大安寺の所有を離れていたことは明白だろう。とすれば、文武朝大官大寺についても同様の可能性があり、大安寺の返還要求にその寺地が含まれていたことは充分考えられる[25]。したがって、風間が「高市大寺を藤原京の大官大寺址周辺に求める根拠はすべてなくなった」と断じたのは正しくなく、高市大寺は文武朝大官大寺の近傍に存在した可能性が高いことを確認しておく。

神護景雲元年の献入地　高市大寺の位置を推定するうえで注目されるもう一つの史料が、『類聚三代格』巻15「寺田事」所収の神護景雲元年（767）12月1日太政官符（【史料8】）である。そこでは、大安寺に献入された6町の田のうち、大和国の「路東十一橋本田」と「路東十二岡本田」の計2町が「高市郡高市里専古寺地西辺」[26]にあったことが記される。

【史料8】　『類聚三代格』巻15 寺田事　神護景雲元年12月1日太政官符

太政官符

合田六町

大和国二町《一町路東十一橋本田。一町路東十二岡本田。在二高市郡高市里専古寺地西辺一》

右修二理金堂内仏菩薩幷歩廊中門文殊維摩羅漢等像一料

（中略）

以前被二左大臣宣一偁、奉レ勅、件田並永献二入於大「寺」安寺一。

神護景雲元年十二月一日　　（《　》は割註）

これらについて、田村吉永は「専」を「東」の誤鈔とし、路東二十八条四里十一坪・十二坪に比定した[27]。けれども、その場所は文武朝大官大寺東方の丘陵西麓、田村が狂心渠の痕跡とした「ニシノフケ」のフケ田に面した位置にあたり、寺地の東辺ではありえても西辺とはなりえない。

一方、それより1里西の路東二十八条三里十一坪（字サコツメ）・十二坪（字フケノツボ）は、まさに「専古寺地西辺」とするにふさわしい場所である。この場合、「岡本田」は正しく西山丘陵の南麓にあたり、「橋本田」についても、付近に現在も橋が架かるように、飛鳥川にかけられた橋を想定して無理がない。

よって、神護景雲元年の献入地は、ギヲ山西方の路東二十八条三里に比定でき、その一帯（雷（いかずち）廃寺）から、文武朝大官大寺に先行する、平城京の大安寺と共通の四重弧文軒平瓦・凸面布目平瓦などが出土している事実[28]とあわせて、前身である高市大寺の伽藍が存在した可能性が想定される[29]。

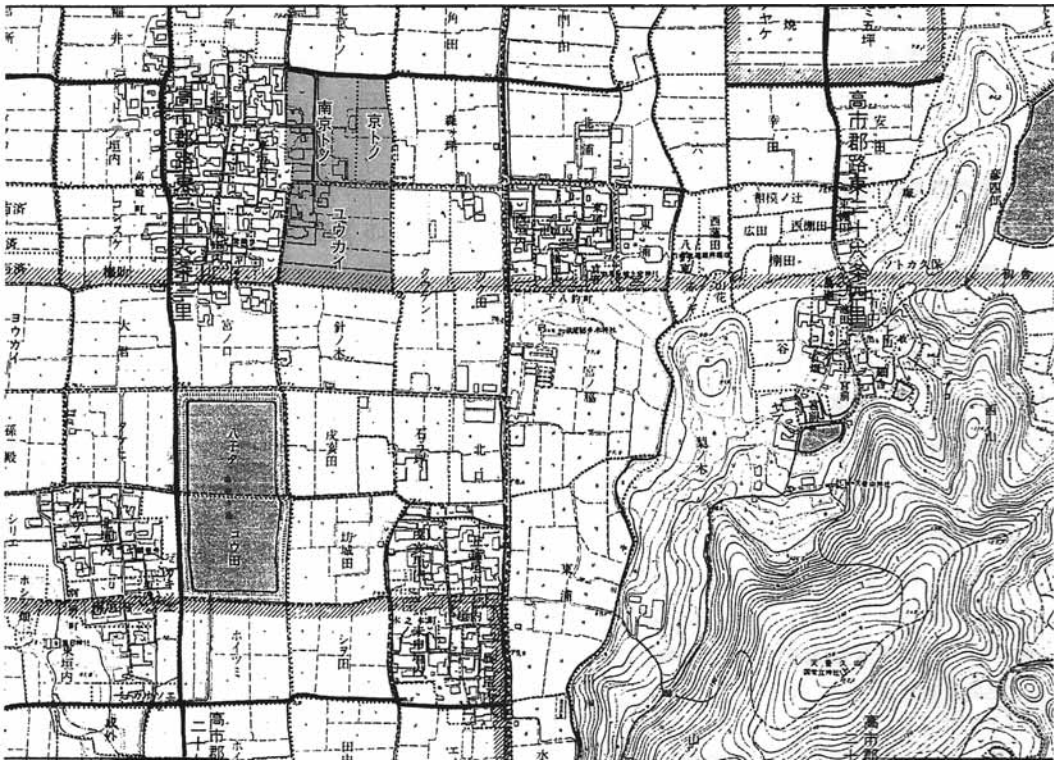

図６　相原による路東二十六条三里の献入地比定（網目）

相原による献入地の比定　　これに対し、相原は、路東十一「橋本田」と路東十二「岡本田」の２町を、路東二十八条三里ではなく、２条（約 1.3 ㎞）北の路東二十六条三里に比定する（図 6)。そして、「高市郡高市里専古寺地西辺」を「木之本廃寺」＝高市大寺にかかわるものとし、中の川を古代の高市郡と十市（とおち）郡の郡界とみて、古代は高市郡に属した「木之本廃寺」を高市大寺にあてることに問題はないとした。

５　高市大寺の位置の再検討

以下、高市大寺の所在地について再検討する。

神護景雲元年の献入地の比定　　まず、神護景雲元年（767）の大安寺への献入地を路東二十六条三里にあてうるかどうかを検証しよう。この史料は、「高市郡高市里」と郡名および固有里名を記す一方、条と里の数詞呼称は省略しているため、数詞呼称から里の位置を特定することができない。相原が路東二十六条三里十一坪（字ユウカイ）・十二坪（字京トノ・南京トノ）に比定したのは、「専古寺地」を「木之本廃寺」に結びつけて、高市大寺であることを裏づけようとしたからにほかならないが、はたしてそれは成り立つのだろうか。

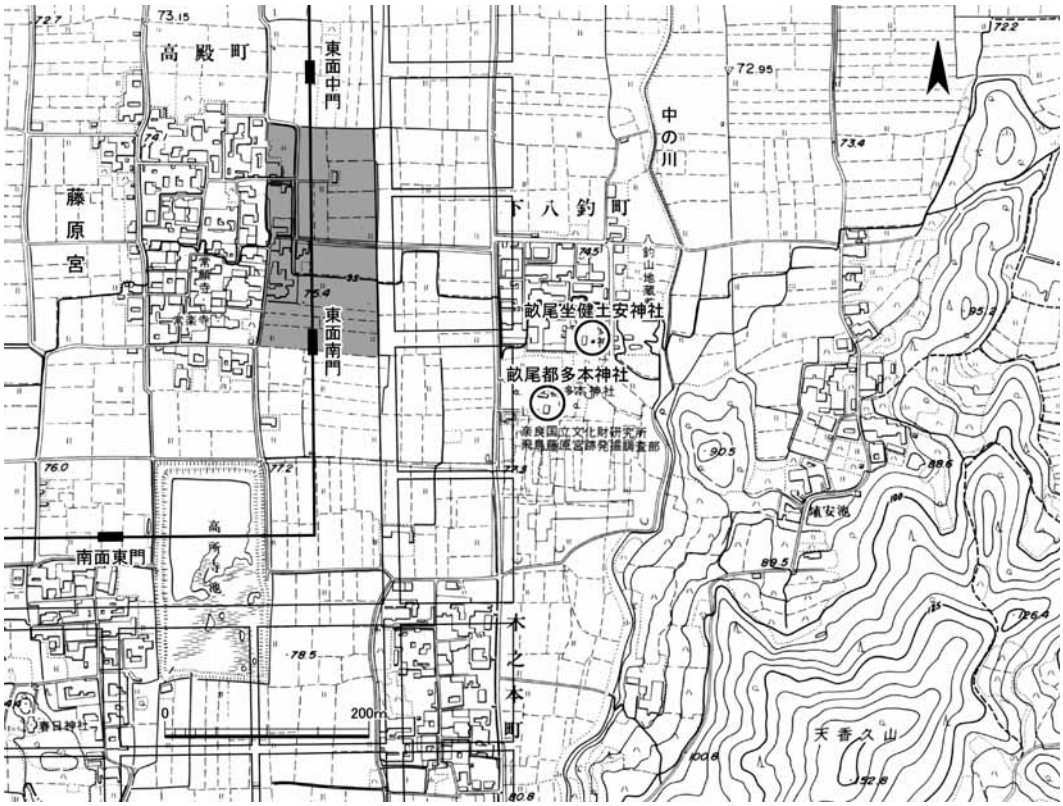

図７　相原の比定地と藤原宮・関連施設の位置関係
（網目が相原による献入地比定、条坊は一部のみ表示）

ここで留意しなければならないのは、上記の坪を藤原宮の東面大垣が縦貫し、いずれの坪も、そのほぼすべてが藤原宮および外周の大路との間に設けられた外周帯に含まれる、という事実である（図 7）。当然のことながら、こうした場所に高市大寺や文武朝大官大寺の寺地が存在したとは考えられない。

また、相原は、それらの坪について、「香具山からは 350m程離れているが、『岡本田』の由来とも考えられなくもない」と記すが、香具山との間に条里 3 町分以上の平坦地を介した坪を「岡本田」と称したとするのは強弁にすぎよう。「橋本田」を、すでに廃絶していた藤原宮の外濠にかけられた橋に結びつけるのも、無理な想定としか思われない。

よって、神護景雲元年（767）の大安寺への献入地を路東二十六条三里にあてる相原説は成立しがたく、前節で述べたとおり、路東二十八条三里に比定するのが妥当である。これは、「高市郡高市里専古寺地西辺」が、「木之本廃寺」を高市大寺とする根拠にはなりえないことを意味している。

同時に、路東二十八条三里が固有里名で「高市里」と称された事実があらためて注目

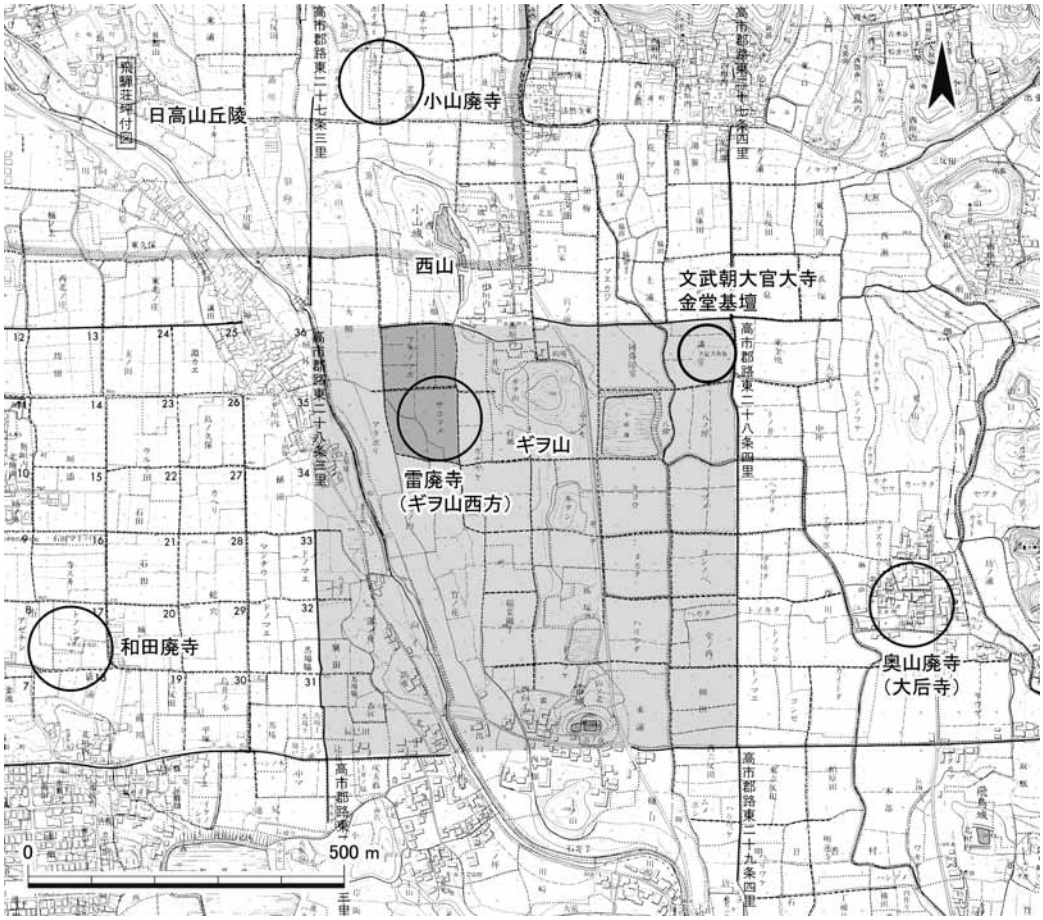

図８　路東二十八条三里の献入地比定と「高市里」
（濃い網目が献入地、薄い網目は「高市里」）

される。前身である百済大寺が、郡としては十市郡に属し、その一部にあたる狭域地名「百済」を寺名とした点からみても、高市大寺の「高市」が、高市郡の中の狭域地名に由来することは確実だからである。路東二十八条三里が「高市里」とよばれていた以上、高市大寺の候補地はまずそこに求めるべきであろう[30]（図 8）。

高市郡と十市郡の郡界　　次に、中の川を古代の高市郡と十市郡の郡界とすることの当否を検討したい。たしかに、郡界が移動する例はしばしばあったものの、「木之本廃寺」の一帯が、中世以降、十市郡に属したことは確実とみられる[31]（図 9）。この場合、古代は高市郡に属したとするには、それなりの根拠が必要なはずだが、そうした論証がなされているとはいいがたい。郡界が変更されたとの推定が、「木之本廃寺」を高市大寺に比定するために導き出されたとすれば、恣意的にすぎるのではないか。

また、『延喜式』神名帳（じんみょうちょう）には、「十市郡十九座」の中に、「畝尾坐健土安神社（うねおにますたけはにやすのかみのやしろ）」と「畝（うね

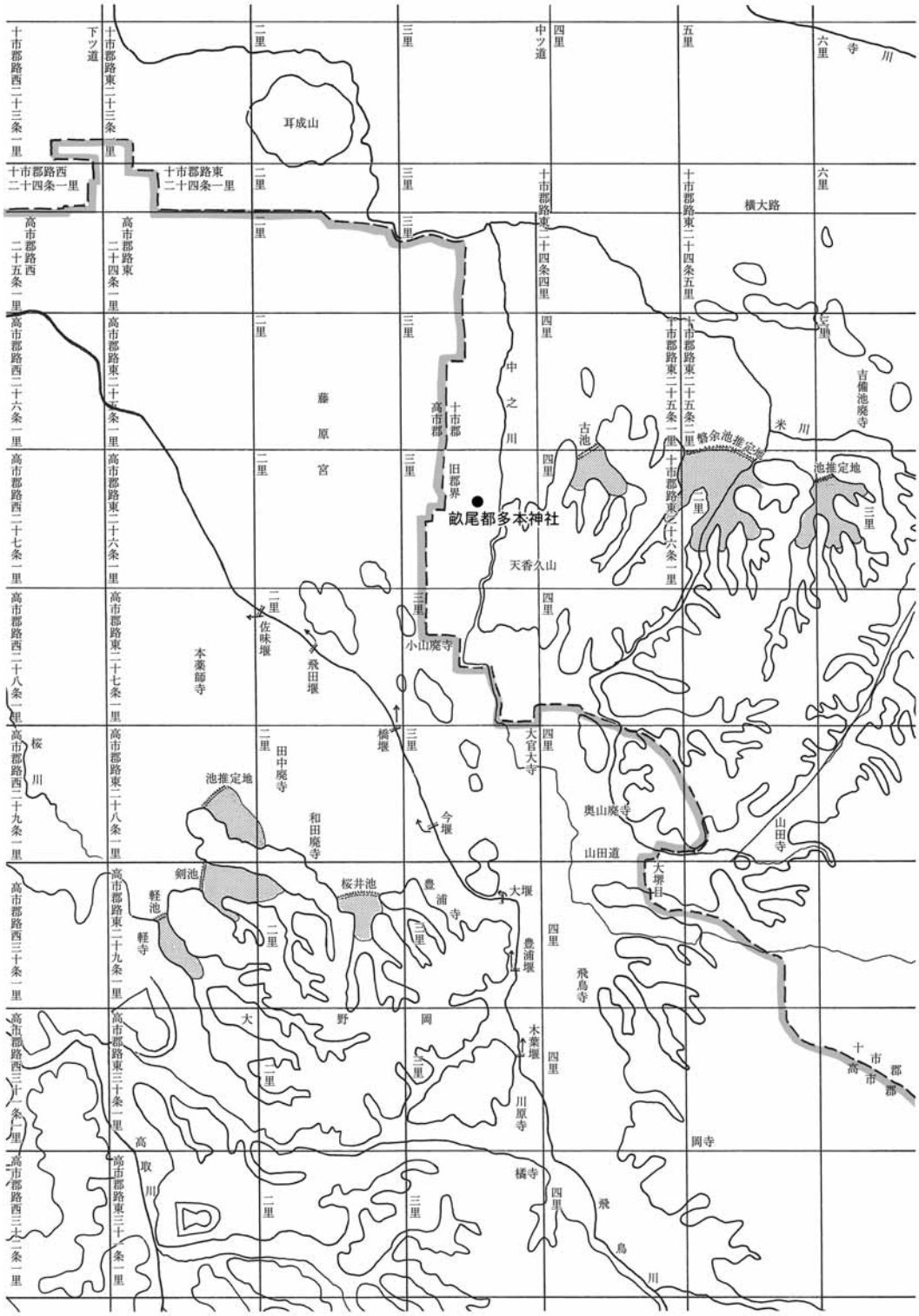

図９　高市郡と十市郡の旧郡界

尾都多本神社」が記される。現在、この両社は、中の川の西側、下八釣の集落が載る微高地にほぼ隣接して所在し（前者は橿原市下八釣町、後者は橿原市木之本町）[32]、相原が想定する高市大寺の伽藍と重なるか、ごく近接した位置にある（図 7）。したがって、中の川が古代の郡界だったとすると、その東側の十市郡に属した両社が、ともに中の川を西に越えた現在地に移転したことになるが、それを示す史料はまったくない。相原が述べるように、神社もしばしば場所を移動することがあるとはいえ、先の郡界と同様、何の根拠も示さずに神社の移動を推定するのは説得力に欠けよう。

逆に、畝尾都多本神社に関しては、祭神である泣沢女神が、『古事記』上巻に「香山の畝尾の木本に坐す」と記されることが注意される[33]。伊耶那岐命が伊耶那美命の死を悲しんで流した涙から生まれた彼女が「香山の畝尾の木本」に坐すとする記述は、畝尾都多本神社の位置が、遺称地である現・木之本町から大きく動いてはいないこと、すなわち「木之本廃寺」周辺が古代においても十市郡に属したことを強く示唆する[34]。

以上、中の川を古代の高市郡と十市郡の郡界とし、「木之本廃寺」が古代は高市郡に属したとする相原の論は成立しえないと考える。

遺構の欠如と出土瓦の様相　畝尾都多本神社周辺（「木之本廃寺」）から百済大寺の所用瓦が出土することは広く知られ、高市大寺の有力な候補とみなされてきた。しかしながら、寺院跡であることを示す遺構は検出されていない。もっとも、この点は、筆者らが高市大寺を想定した雷廃寺（ギヲ山西方）も同様であって、相原は、寺院遺構が検出されていないこと、土壇の痕跡もみられないことから、雷廃寺を寺院ではないとした。ところが、一方で「木之本廃寺」については、「土壇はなく、寺院の微〔ママ〕証は確認できない」（下八釣の集落の北方および西方）、「土壇の高まりは確認できない」（下八釣集落内）としつつも、「地割として残される事例がある」として、下八釣の集落内道路の「不自然屈曲」を根拠に、高市大寺の伽藍を想定する（図 10）。

けれども、これはダブルスタンダードの感が否めず、現在までの調査成果を勘案しても、相原の推定地に大規模な伽藍が存在したとみるのは難しい[35]。集落内道路のわずかな屈曲から土壇の存在を復元するのも、空想の域を出ないだろう。また、高市大寺であれば、完成間近で焼失した文武朝大官大寺と異なって、平城京移転までの間は寺院としての機能を維持したはずであるが、そうした寺院が藤原京期をつうじて存続していたことを示す徴証も皆無である。

なお、畝尾都多本神社に南接する一帯（1 坊＝4 町説では左京六条三坊、1 坊＝16 町とする復元では左京六条二坊）は、奈良国立文化財研究所により大規模な発掘調査が行われている。そこで出土した瓦には、百済大寺所用瓦以外に、長林寺や法輪寺など斑鳩地域の

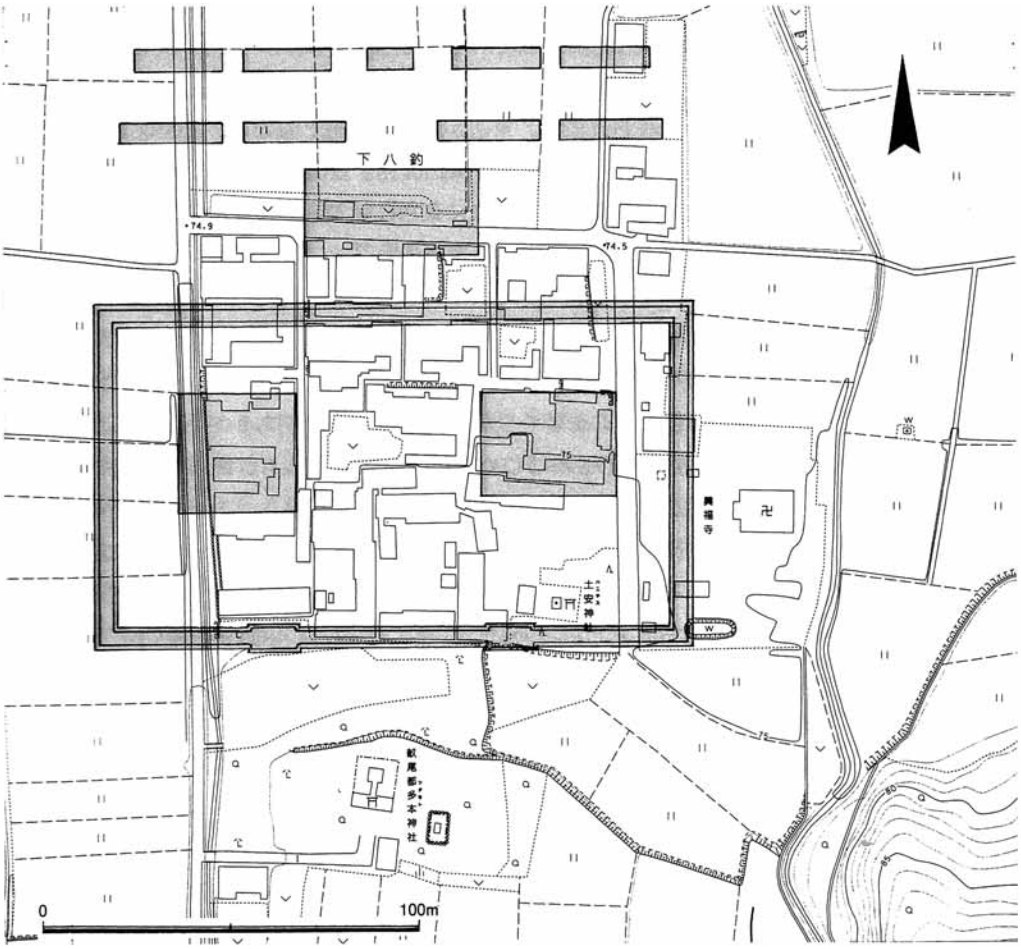

図 10　相原による高市大寺の想定

軒瓦のほか、丸・平瓦でも小山廃寺（紀寺）をはじめ、他寺院の所用瓦（または所用瓦として製作されたもの）が一定数含まれる。そして、上記のさまざまな型式の瓦が藤原京造営期（Ⅲ-A 期）に集積され、藤原京期前半（Ⅲ-B 期）以降、不用品が藤原宮式軒瓦とともに溝や土坑などに廃棄された状況がうかがえる[36]。

「木之本廃寺」の性格　以上の点からすると、これらの雑多な瓦を、高市大寺という特定の一寺院に結びつけるのは躊躇せざるをえない。「木之本廃寺」の性格については、大脇潔が「瓦の運搬にあたっての集積場、ないしは備蓄の場」と想定したが[37]、それが当を得ている可能性を含めて、再考が必要であろう。

市大樹は、「左京職」の墨書をもつ斎串の出土などから、上記の調査地に、藤原京期は 4 町を占める京職（左京職）がおかれたと推定し（前半のⅢ-B 期は京職、後半のⅢ-C 期は左京職）、京職の設置は、1 町ずつを占地した藤原京造営期（Ⅲ-A 期）まで溯りうるとす

る。また、藤原京造営期には、造営の中心を担った造京司（『日本書紀』持統 7 年〔693〕2 月己巳〔10 日〕条）も存在したと考え、造営の本格化にともない、調査地の東を北流する「狂心渠」（SD4143）にとりつくかたちで掘削された東西大溝（SD4130）が、造営資材の運搬機能を有したとみる[38]（図 11）。

「藤原宮の役民の作れる歌」（『万葉集』巻 1－50 番歌）には、藤原宮・京の造営にあたって、近江国の田上山（たなかみやま）で伐採した木材を宇治川に流し、筏に組んで木津川を溯らせたようすが歌われている。市が述べるように、泉津（木津）で陸揚げしたそれらは、平城山（ならやま）を

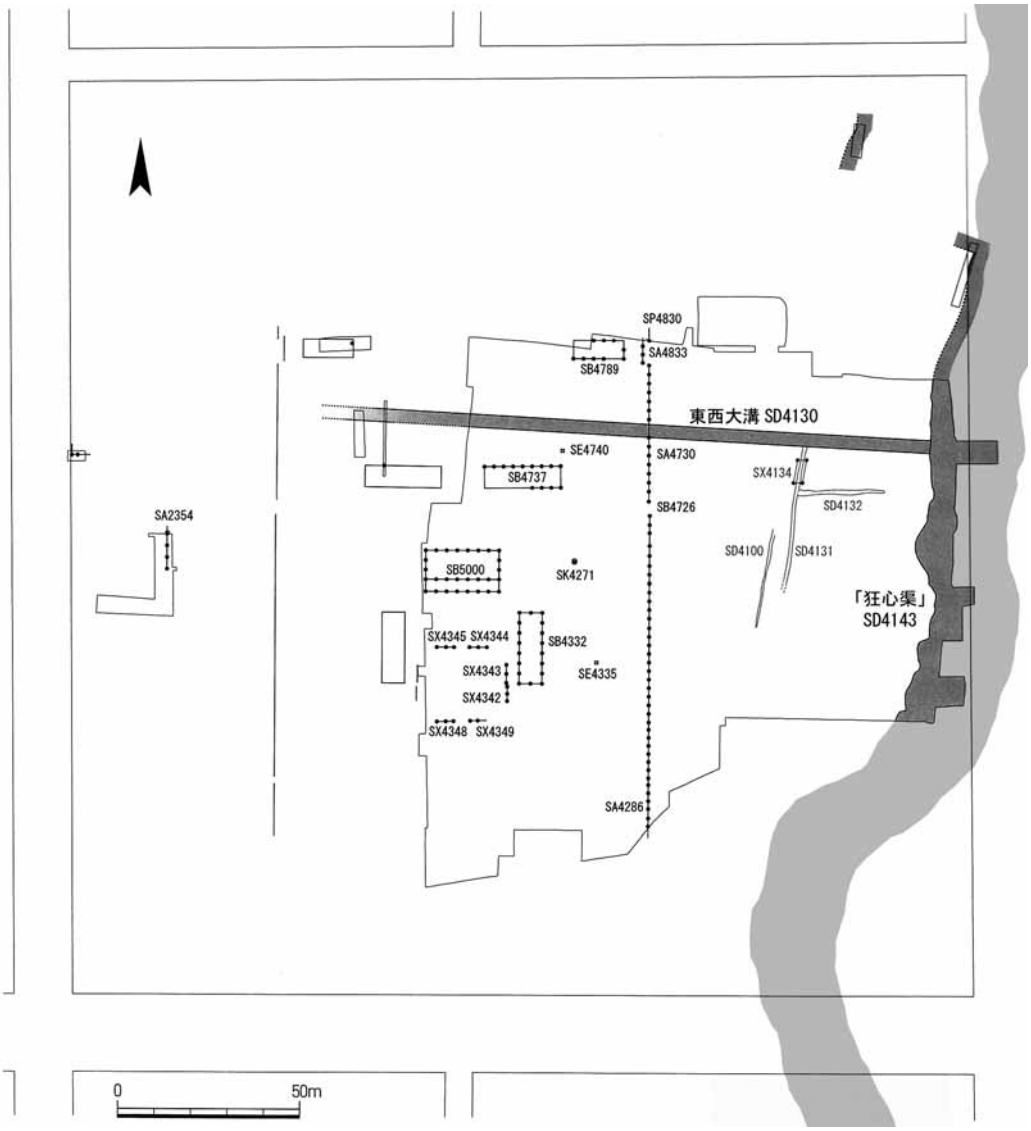

図 11　藤原京左京六条の京職（藤原京期前半）と「狂心渠」

越えたのち、佐保川、初瀬川、米川などの大和川水系と「狂心渠」ほかの運河を利用して運搬された可能性が高い。そして、最終的に陸揚げして、調査地周辺に集積されたと考えられる。

この場合、集積された資材は木材にかぎらず、建築材料全般に及んだとみて支障はない。おそらく、さまざまな造営資材がここに集められて、各所の建設現場へと運ばれ、不用品は近辺に廃棄されたものと推定される[39]。廃棄品の中で、瓦は腐朽せずに遺存するため目につきやすく、それが瓦葺寺院の想定につながったわけだが、「木之本廃寺」が寺院として存在したかどうかは、あらためて検討を要しよう。

6　高市皇子の香具山宮

高市皇子の殯宮挽歌　むしろ、この一帯に関して想起されるのは、天武天皇の第一皇子であった高市皇子の香具山宮である。持統10年（696）7月に死去し、「後皇子尊」と称された彼は、『万葉集』の挽歌（巻2－199番歌）に見えるように。生前、「香来山の宮（香具山宮）」とよばれる皇子宮を構えていた。ちなみに、藤原京の宅地班給規定によると、右大臣は4町の宅地が与えられることになっており（『日本書紀』持統5年（691）12月乙巳〔8日〕条）、その前年の7月に太政大臣に任ぜられた高市皇子は、4町の宅地を保有できたはずである。

「高市皇子尊の城上殯宮の時に、柿本朝臣人麻呂の作れる歌一首　幷せて短歌」と題詞を付された上記の挽歌は、『万葉集』最長の長歌としても知られる。前半部分は、父である天武天皇や壬申の乱における高市皇子の活躍を歌っており、皇子の死去を主題とする後半部分は次のとおりである。

> やすみしし　わが大君の　天の下　奏したまへば　万代に　然しもあらむと　木綿花の　栄ゆる時に　わが大君　**皇子の御門**を　神宮に　装ひまつりて　使はしし御門の人も　白たへの　麻衣着て　**埴安の御門**の原に　あかねさす　日のことごと　鹿じもの　い這ひ伏しつつ　ぬばたまの　夕に至れば　大殿を　振り放け見つつ　鶉なす　い這ひもとほり　侍へど　侍ひ得ねば　春鳥の　さまよひぬれば　嘆きも　いまだ過ぎぬに　思ひも　いまだ尽きねば　言さへく　百済の原ゆ　神葬り　葬りいませて　あさもよし　城上の宮を　常宮と　高くしたてて　神ながら鎮まりましぬ　然れども　わが大君の　万代と　思ほしめして　作らしし　**香来山の宮**　万代に　過ぎむと思へや　天のごと　振り放け見つつ　玉だすき　かけて偲はむ　恐くありとも　（199）

この中で、高市皇子の宮は、「皇子の御門」「埴安の御門」「香来山の宮」と歌われてい

る。いずれも、同じ宮をさした別の表現であり、「香来山の宮」の名が示すごとく、それは香具山の麓にあったと考えてよい。

また、これには、以下の短歌2首（巻2－200・201番歌）が添えられている。

ひさかたの天知らしぬる君ゆゑに　日月も知らず恋ひ渡るかも　(200)
埴安の池の堤の隠沼の　行方を知らに舎人は惑ふ　(201)

香具山宮が「埴安の御門」ともよばれたのは、同時に、201番歌の「埴安の池」にほど近い場所でもあったことによるのであろう。さらに、つづけて「或る書の反歌一首」（巻2－202番歌）では、次のように歌われている。

泣沢の神社に神酒据ゑ祈れども　わが大君は高日知らしぬ　(202)

この「泣沢の神社」は、先述の畝尾都多本神社をさすとみられ[40]、香具山宮がその近辺に存在したことがうかがえる。

埴安の池　なお、「埴安」は、「藤原宮の御井の歌」（巻1－52番歌）にも登場する。

やすみしし　わご大君　高照らす　日の皇子　荒たへの　藤井が原に　大御門　始めたまひて　**埴安の　堤**の上に　あり立たし　見したまへば　大和の　青香具山は　日の経の　大き御門に　青山と　繁さび立てり　畝火の　この瑞山は　日の緯の　大き御門に　瑞山と　山さびいます　耳無の　青菅山は　背面の　大き御門に　宣しなへ　神さび立てり　名ぐはしき　吉野の山は　影面の　大き御門ゆ　雲居にそ　遠くありける　高知るや　天の御陰　天知るや　日の御陰の　水こそば　常にあらめ　御井の清水　(52)

藤原宮が香具山、畝傍山、耳成山の大和三山に囲まれていた事実を示す有名な長歌だが、そこでは、「埴安の（池の）堤」に立つ持統天皇からみて、香具山は東、畝傍山は西、耳成山は北に存在したことが歌われている。

こうした点および地形を考え合わせると、「埴安の池」が、藤原宮とその南東に位置する香具山の間、具体的には、香具山の北西にあたる橿原市下八釣町に位置したことは確実である。下八釣の集落の北方は、現状でも地形的に一段低い水田となっており、地元の方によると、戦後の土地改良以前はフケ田（沼田）の様相を呈していたという。往時は「埴安の池」の水面が広がっていたとみてよく、おそらく、それは、春になると大宮人が船を浮かべて遊んだ池でもあったのだろう（巻3－257番歌）。

天降りつく　天の香具山　霞立つ　春に至れば　松風に　池波立ちて　桜花　木の暗茂に　沖辺には　鴨妻呼ばひ　辺つ方に　あぢ群騒き　ももしきの　大宮人の

退(まか)り出て　遊ぶ舟には　楫棹(かぢさを)も　なくてさぶしも　漕ぐ人なしに　　(257)

香具山宮の位置　「埴安の池」を以上のように推定できるとすると、「埴安の御門」ともよばれた香具山宮の所在地は、おのずから絞られてくる。すなわち、香具山の麓近くで、かつ埴安の池や「泣沢の神社」(畝尾都多本神社)に近接した場所に限定されよう[41]。そして、皇子宮も天皇宮と同様に、低湿地を避け、高燥な地を選んで占地したことは容易に想像がつく。

また、前述のごとく、畝尾都多本神社南方の一帯が邸宅ではなく、藤原京期には4町を占めた京職(後半は左京職)とみられることから、香具山宮は別の場所に求めざるをえない。とすれば、高市皇子の香具山宮は、畝尾都多本神社の北方、現在の下八釣の集落が載る微高地を措いてほかには想定しがたいであろう。香具山宮が掘立柱構造であったことは確実であり、下八釣の集落の下には、その遺構がいまも良好に遺存していると推測される。

註

1)相原嘉之「古代大和の舟運利用の実態―斉明紀の「狂心渠」を中心に―」『条里制・古代都市研究』第37号、条里制・古代都市研究会、2022年。

2)相原嘉之「高市大寺の史的意義」『奈良大学紀要』第49号、奈良大学、2021年。

3)小澤毅編『吉備池廃寺発掘調査報告―百済大寺跡の調査―』奈良文化財研究所学報第68冊、奈良文化財研究所、2003年。

4)小澤毅『日本古代宮都構造の研究』青木書店、2003年、19～71頁「伝承板蓋宮跡の発掘と飛鳥の諸宮」(初出1988年)。

5)相原嘉之編『酒船石遺跡発掘調査報告書―付、飛鳥東垣内遺跡・飛鳥宮ノ下遺跡―』明日香村教育委員会、2006年。

6)長尾充・水戸部秀樹「飛鳥池東方遺跡の調査―第86次」『奈良国立文化財研究所年報1998-Ⅱ』奈良国立文化財研究所、1998年。長尾充・西口壽生ほか「飛鳥池東方遺跡の調査―第92次・第91-6次」『奈良国立文化財研究所年報1999-Ⅱ』奈良国立文化財研究所、1999年。相原嘉之編『酒船石遺跡発掘調査報告書』前掲註5。

7)吉川真司「小治田寺・大后寺の基礎的考察」『国立歴史民俗博物館研究報告』第179集、国立歴史民俗博物館、2013年。

8)奈良国立文化財研究所「奥山久米寺西方の調査(狂心渠推定地)」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報7』1977年。

9)小澤毅『日本古代宮都構造の研究』前掲註4、154～197頁「飛鳥の宮都空間」。

10)番光・黒坂貴裕「遺構各説(第Ⅲ章2)」玉田芳英編『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅴ―藤原京左京六条三坊の調査―』奈良文化財研究所学報第94冊、奈良文化財研究所、2017年。

11）奈良県立橿原考古学研究所編『大和国条里復原図』奈良県教育委員会、1980 年。

12）田村吉永『飛鳥京藤原京考証』綜芸舎、1965 年、8～12 頁。

13）「西湫」「大湫」の訓みを、相原は「にしのふけ」「おおのふけ」とする。一方、奈良女子大学が運用する「奈良盆地歴史地理データベース」の「小字データベース」では、「にしのおふけ」「おふけ」とする。

14）条坊の数詞呼称は、1 坊の大きさをどう復元するかによって異なる。1 坊＝4 町（約 265m 四方）とする復元（岸俊男『日本の古代宮都』岩波書店、1993 年）における東四坊大路は、1 坊＝16 町（約 530m 四方）とする復元では、東二坊大路となる。小澤毅『日本古代宮都構造の研究』前掲註 4、201～238 頁「古代都市『藤原京』の成立」。

15）和田萃は「磐余池」にあてたが（和田萃「磐余地方の歴史的研究（磐余の諸宮―磐余池に関連して―）」『磐余・池ノ内古墳群』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第 28 冊、奈良県教育委員会、1973 年）、『古事記』応神段に見える「百済池」に比定するのが至当と考える。渡里恒信『日本古代の歴史空間』清文堂、2019 年、255～266 頁「百済大井宮と百済大井家の所在地」（初出 2006 年）。前田晴人「磐余考」『大阪経済法科大学地域総合研究所紀要』第 8 号、大阪経済法科大学地域総合研究所、2016 年。小澤毅『古代宮都と関連遺跡の研究』吉川弘文館、2018 年、185 頁補註 2。

16）松宮昌樹編『磐余遺跡群発掘調査概報Ⅱ―御屋敷・前田地区の調査―』桜井市内 2001 年度発掘調査報告書 5、桜井市文化財協会、2002 年。平岩欣太「大藤原京左京五条八坊、中嶋遺跡」『平成 23（2011）年度橿原市文化財調査年報』橿原市教育委員会、2013 年。石坂泰士「東池尻・池之内遺跡、大藤原京左京五条八坊」『平成 25（2013）年度橿原市文化財調査年報』橿原市教育委員会、2015 年。

17）相原嘉之「古代大和の舟運利用の実態」前掲註 1、123 頁。

18）大脇潔「蘇我氏の氏寺からみたその本拠」堅田直先生古希記念論文集刊行会編『堅田直先生古希記念論文集』真陽社、1997 年。竹内亮『日本古代の寺院と社会』塙書房、2016 年、109～140 頁「飛鳥寺と諸寺の禅行」（初出 2000 年）。

19）Google Earth の画像でも明瞭に判読できるほか、日向寺推定寺域の南を東西に走る道路を通れば容易に実感できる。現地をよく知るはずの相原が、なぜこのような地形・水系を無視した推定を行ったのか、疑問とせざるをえない。

20）木下正史『飛鳥幻の寺、大官大寺の謎』角川書店、2005 年、217～227 頁。後述する畝尾都多本（うねおつたもと）神社周辺から百済大寺所用瓦をはじめとする瓦が出土することから、寺院の存在を想定して、「木之本廃寺」と仮称されている。

21）星野良史「高市大寺・大官大寺の造営過程」『法政考古学』第 10 集記念論文集、法政考古学会、1985 年。

22）同じ歌は『日本霊異記』下巻第 38 話にも見え、また、『万葉集』にも「屋部の坂の歌」と題された別の歌がある（巻 3－269 番歌）。

23）小澤毅「吉備池廃寺の発掘調査」『仏教芸術』235 号、毎日新聞社、1997 年。小澤毅『古代宮都と関連遺跡の研究』前掲註 15、162～187 頁「百済大寺の比定とその沿革」（初出 2003

年)。

24) 風間亜紀子「高市大寺関係史料の再検討―その所在地をめぐって―」『川内古代史論集』第7号、東北大学古代史研究会、2010年。

25) 小澤毅「高市大寺の所在地をめぐって」菱田哲郎・吉川真司編『古代寺院史の研究』思文閣出版、2019年。

26)「専寺」は貴寺・当寺の意味。吉川真司の教示による。「路東十一」「路東十二」は、大和国の京南条里のうち、下ツ道の東に広がる路東条里の坪番付を示すが、条と里の数詞呼称は省略されている。

27) 田村吉永『飛鳥京藤原京考証』前掲註12、12～21頁。

28) 大脇潔「大安寺 1 ―百済大寺から大官大寺へ―」『古代寺院の移建と再建を考える』帝塚山考古学研究所、1995年。中井公「大安寺 2 ―大官大寺から大安寺へ―」『古代寺院の移建と再建を考える』帝塚山考古学研究所、1995年。

29) 小澤毅「吉備池廃寺の発掘調査」前掲註23。小澤毅『古代宮都と関連遺跡の研究』前掲註15、162～187頁「百済大寺の比定とその沿革」。小澤毅「高市大寺の所在地をめぐって」前掲註25。

30) 小澤毅『古代宮都と関連遺跡の研究』前掲註15、162～187頁「百済大寺の比定とその沿革」。小澤毅「高市大寺の所在地をめぐって」前掲註25。

31)「角川日本地名大辞典」編纂委員会編『角川日本地名大辞典 29 奈良県』角川書店、1990年、392頁「きのもと 木之本」の項。大脇潔「大野岡北麓の池と飛鳥川の堰」納谷守幸氏追悼論文集刊行会編『飛鳥文化財論攷―納谷守幸氏追悼論文集―』納谷守幸氏追悼論文集刊行会、2005年。

32) 堀井純二「畝尾坐健土安神社」「畝尾都多本神社」式内社研究会編『式内社調査報告 第3巻 京・畿内3』皇學館大学出版部、1982年。木村芳一「畝尾坐健土安神社」「畝尾都多本神社」谷川健一編『日本の神々―神社と聖地― 第4巻 大和』白水社、1985年。

33)『日本書紀』巻1 神代上第5段の一書第6にも「其の涙堕(お)ちて神に為(な)る。是(これ)即ち畝丘(うねお)の樹(この)下(もと)に居(ま)す神、啼沢女命(なきさわめのみこと)と号(もう)す」と見える。

34) 市大樹「文字資料からみた調査地の性格（第Ⅵ章4)」玉田芳英編『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅴ―藤原京左京六条三坊の調査―』奈良文化財研究所学報第94冊、奈良文化財研究所、2017年。

35) 大脇潔「『百済大寺』論争の行方をめぐって」『シンポジウム 吉備池廃寺をめぐって―百済大寺はどこか―』帝塚山大学考古学研究所、1998年。市大樹「文字資料からみた調査地の性格」前掲註34。

36) 中川あや「瓦塼類（第Ⅵ章3)」玉田芳英編『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅴ―藤原京左京六条三坊の調査―』奈良文化財研究所学報第94冊、奈良文化財研究所、2017年。

37) 大脇潔「『百済大寺』論争の行方をめぐって」前掲註35。

38) 市大樹「文字資料からみた調査地の性格」前掲註34。市は、SD4143について「『狂心渠』の可能性がある南北大溝」と記す。

39）同様に、百済大寺の資材も、高市大寺への移建のさい、米川（当時の「百済川」）と「狂心渠」を利用して運ばれた可能性が高い。

40）武田祐吉『増訂 万葉集全註釈』角川書店、1956 年、566～567 頁。池田源太『大和三山』学生社、1972 年、59～80 頁。堀井純二「畝尾都多本神社」前掲註 32。木村芳一「畝尾都多本神社」前掲註 32。菅野雅雄『初期万葉歌の史的背景』和泉書院、1994 年、153～176 頁「泣沢の神社に祈る」（初出 1990 年）。

41）武田祐吉『増訂 万葉集全註釈』前掲註 40、538～567 頁。池田源太『大和三山』前掲註 39、59～80 頁。岸俊男『古代宮都の探究』塙書房、1984 年、61～81 頁「皇子たちの宮」（初出 1981 年）。上野誠『古代日本の文芸空間―万葉挽歌と葬送儀礼―』雄山閣、1997 年、170～180 頁「高市皇子挽歌と城上殯宮」（初出 1995 年）、180～189 頁「高市皇子挽歌と香具山宮」（初出 1997 年）。

挿図出典

図 1 ：相原嘉之「古代大和の舟運利用の実態」前掲註 1、120 頁図 2。

図 2 ：相原嘉之「古代大和の舟運利用の実態」前掲註 1、124 頁図 5。

図 3 ：相原嘉之「古代大和の舟運利用の実態」前掲註 1、125 頁図 6。

図 4 ：相原嘉之「古代大和の舟運利用の実態」前掲註 1、122 頁図 3。

図 5 ：奈良文化財研究所 1/1,000 地形図「木之本」「香久山」「雷」「飛鳥」および同研究所発掘区データに加筆。

図 6 ：相原嘉之「高市大寺の史的意義」前掲註 2、82 頁図 2。

図 7 ：奈良文化財研究所 1/ 5,000 地形図データに加筆。

図 8 ：小澤毅「高市大寺の所在地をめぐって」前掲註 25、180 頁図 2 を改変。

図 9 ：大脇潔「大野岡北麓の池と飛鳥川の堰」前掲註 31、167 頁第 1 図を一部改変。

図 10：相原嘉之「高市大寺の史的意義」前掲註 2、87 頁図 3。

図 11：黒坂貴裕「遺構（第Ⅵ章 1）」玉田芳英編『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅴ―藤原京左京六条三坊の調査―』奈良文化財研究所学報第 94 冊、奈良文化財研究所、2017 年、362 頁 Fig.258 を一部改変。

後　記　本稿に掲載した挿図の作成にさいしては、奈良文化財研究所のお世話になった。また、相原嘉之氏、市大樹氏、稲田登志子氏、大脇潔氏、竹内亮氏、玉木学恵氏、森田和世氏、山本崇氏、吉川真司氏から多くのご教示をいただいた。篤く感謝の意を表したい。

（おざわ　つよし　三重大学人文学部）